促進のため、途上国の自助努力、さらに先進国からの援助や直接投資、ならびに貿易振興が不可欠なこと、同時に先進国からの技術・知識を吸収し、労働生産性を向上させることが大切であり、また、技術・知識の移転による人と人の交流が極めて重要なチャネルである、と強く意識するようになったことである。

東工大修士課程修了後、九一年四月から国際協力や国際交流に関する事業を実施している笹川平和財団にプログラムオフィサーとして勤めることとなった。財団では、主に北東アジア、東南アジア、中央アジアおよび南コーカサス地域に関連する事業を担当してきた。具体的には該当する対象地域での経済開発が抱える諸問題、市場経済体制への転換ならびに地域間協力等に関する問題点を明らかにし、それらの問題解決に向けた知的支援のプロジェクトの策定と実施、事業計画案の事前評価やプロジェクト完了後の評価が主な業務内容であった。私はこれらの取り組みに当たって、社会工学の視点で問題解決を目指していた。それと同時に、人と人の交流および人的ネットワーク構築や強化を重視し、それらを通じて知識や経験が共有され、それが問題解決にとって知的な蓄積に貢献していると信じている。

1990年大阪視察研修――国際花と緑の博覧会にて（後列右が筆者）

笹川平和財団の業務を通じて、先進国から発展途上国への知識や技術移転の重要性をますます実感するようになったのである。こうした意識から、九五年四月から九八年三月までの三年間に財団の仕事をしながら、東北大学大学院で「東アジア諸国の経済成長と技術移転」をテーマにした博士論文をまとめ、博士号（国際文化）が授与された。そして、財団の業務から培われた現場での体験、人文・社会科学の理論、さらに社会工学的な思考、それらに基づく財団での実践活動を通じて、意識しないうちに大学という場で教育と研究の両面に携わりたいと思うようになっていた。そういう思いが募る時に、人と仕事の縁に恵まれて、今勤めている大学に助教授として迎えられたのであった。

大学の教育と研究現場で

大学に籍を移してから教育の現場では、学生に対して受け身的な体質を改め、学際的なアプローチにより問題を発見し、それを解決する方法を自ら考え、そして導かれた答えを立説する習慣を身に付けさせることを重視している。そのためゼミで取り扱うテーマは、環境、教育、経済開発、高齢化社会、技術移転、情報通信、人口移動等の幅広いものとなっている。また、比較的少ない留学生に対しては、日本人学生との議論を奨励している。それは異なる生活背景や多様な価値観に基づきながら、人と人の対話や交流による問題解決がますます求められている現状において、大学が国際交流の最も良い練習場であると考えているからである。これも上述した私の人生を変えた二つの転換点と経験によるものであると言える。

国際文化教育交流財団の奨学金を受けた二年間は短かったかもしれないが、私の人生にとって大きな知的な財産を獲得する源泉となったと言っても過言ではない。

日本留学で獲得したもの

ラウ シン イー
LAU, Sim Yee
麗澤大学国際経済学部教授

マレーシア出身。一九八九年東京工業大学工学部卒業、九一年同大学院修士課程修了。九一年笹川平和財団勤務、九八年東北大学大学院博士号（国際文化）取得。二〇〇〇年四月より現職の傍ら笹川平和財団研究調査役。

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

ルックイースト政策の影響で来日

私は、マレーシアのマハティール首相（当時）が一九八二年から推進した「ルックイースト政策」の影響を受けて一九八三年十一月に来日した。最初の約一年三カ月間は日本語を学習し、八五年四月に東京工業大学工学部に入学した。そして、八九年四月から九一年三月までの二年間は、国際文化教育交流財団（八九年度）の奨学金を得て同大学大学院理工学研究科修士課程に進学し社会工学専攻に在籍した。もともとエンジニアを目指して日本に留学したが、東京工業大学工学部入学後に、人々の行動様式、人間と社会が係わる諸問題に興味を持つようになった。このことから私の関心は自然科学から人文・社会科学、とりわけ経済学という学問領域に移っていった。同財団から受領した二年間の奨学金を使いながら、東京工業大学大学院で発展途上国が直面している経済開発の諸問題について研究し、日本における外国人労働者問題をテーマに日本とアジア諸国間の経済協力の視点を踏まえて修士論文をまとめた。実は本稿を引き受けたときに、日本留学の経験を振り返って見ると、国際文化教育交流財団が与えてくれた奨学生の二年間が私の人生にとって二つの大きな転換点を与えてくれたと思っている。その一つは社会工学を専攻したこと、もう一つはその専攻在籍中に取り組んだ研究テーマから得られた問題意識である。

社会工学と発展途上国に関する研究

まず第一の点。社会工学は、人間と社会システムに係わる政治・経済・社会・環境・文化等の多岐にわたる領域での諸問題の解決方法を考究する学問である。つまり、問題解決には、学際的な学問（経済学、経営学、政治学、社会学、心理学、文化人類学等）の視点に立脚しながら、取り扱う問題領域のデータ、すなわち、問題意識、行動様式、市場調査、政治的決定に関する定量定性的な情報に基づくことで、その問題に対処する予測と解決方法の代替案や意思決定の評価を行う方法論を提供するものである。社会工学の学問的な方法論を身に付けた者は、社会現象における問題の所在を発見し、その解決のため目標の設定と予測を行い、問題解決の代替案を設定することができ、それらを選択するために評価し、さらに実行に移された案がもたらす効果を評価することができると期待されている。こうした視点から考えて見ると、私もこのような専門知識と方法論が身に付き社会工学的な思考で行動していると思う。

二つめとして、テーマとして選んだ発展途上国に関する研究を通じて、経済開発の